阿見町の国際化プロジェクト―新たな課題の解決に向けて

（自治体等側）阿見町町民生活部町民活動課・課長
竹之内　英一
（大学側）茨城大学全学教育機構・准教授
瀬尾　匡輝

連携先

阿見町町民生活部町民活動課
阿見町国際交流協会

プロジェクト参加者

竹之内英一　（阿見町町民活動課、課長：プロジェクト総括）
髙須徹　（阿見町町民活動課、課長補佐：企画・運営、関係機関調整）
千葉浩　（阿見町町民活動課、係長：情報収集、会場の手配）
千葉公平　（阿見町町民活動課、課員：企画・運営補助）
湯原清和　（阿見町国際交流協会、事務局長：企画・運営、関係機関調整）
二井矢あさ子（阿見町国際交流協会、事務局員：企画・運営補助）
坂上伸生　（茨城大学農学部、准教授：企画・運営）
瀬尾匡輝　（茨城大学全学教育機構、准教授：プロジェクト総括）

プロジェクトの概要

① プロジェクトの目的

本事業の対象となる阿見町では、1999 年に 536 人だった町内の在留外国人数は、2009 年には 778 人となり、2023 年には 1,199 人（5 月 1 日現在）となった。この 20 年間で約 2 倍も阿見町内に住む在留外国人数は増えており、出入国管理及び難民認定法の改正、阿見町内の工業団地の開発、都内への通勤の利便性などから、今後もその数はますます増加することが予想される。このような状況で、本事業の申請団体である阿見町町民生活部町民活動課と阿見町国際交流協会は、茨城大学との連携の下、以下の活動を行ってきた。

１）阿見町内の在留外国人支援の現状を探るため、阿見町役場で在留外国人とかかわる部署の担当者を招いた円卓会議を開催した（2020 年度）
２）外国人受け入れの現状と困難を探るため、町内の企業、農業従事者、学校へのアンケート調査を実施した（2021 年度）
３）円卓会議及びアンケート調査の結果を参考にしながら、阿見町国際交流協会の会員と茨城大学の学生が協力して町内の地域住民と在留外国人が交流できるイベントを企画・運営した（2022 年度）

これらの活動を通して、阿見町内において、自治体と大学、地域住民が一体となって地域の国際化を進める土壌ができつつある。だが、活動を通して以下の課題も新たに見えてきた。

１）阿見町国際交流協会の会員や外国人を受け入れる企業や農業従事者の外国人受入の担当者など、在留外国人と関わる人たちは在留外国人に対して理解を示し、積極的にかかわりを持とうとしている。だが、一般的な町民は在留外国人との接点が少なく、在留外国人に対する理解を深めることができていない。このような状況では、在留外国人に対する理解が不足し、ステレオタイプが構築され、思わぬ偏見や差別が生じ、在留外国人と日本人の間に分断を生み出してしまう可能性もある。

２）阿見町国際交流協会では、在留外国人を対象とした日本語教室を提供しているが、小中学生等の子どもは参加することができない。しかしながら、町内の学校を対象に行ったアンケート調査からは、多くの外国にルーツを持つ子どもたちが町内の小中学校に在校していることが明らかになった。そして、そういった小中学校では、教員が日本語指導や進学指導に対して困難を抱いていることもわかった。外国にルーツを持つ子どもたちの高校進学率は約７割にとどまり（国全体の高校進学率は 98%）、高校の中途退学率も一般高校生の７倍になっている（田中，2021）。これらの背景には、子どもたちの両親が日本語を十分に理解することができないために子どもの家庭学習を支援することができず、小学校の初期の学習がおろそかになり、中学校や高校でのより高度な学習についていくことができなくなっていることも影響している。

そこで、本事業では、（１）阿見町の「さわやかフェア」へのブースの出展、（２）外国ルーツの子どもたちに向けた学びの支援活動を実施し、これら２つの課題を解決するとともに、在留外国人を含む阿見町内の地域住民のだれもが安心して暮らせる社会の構築を目指した。

② 具体的な活動計画及び役割

令和５年６月の申請時の活動計画は以下の通りである。

表１　阿見町の「さわやかフェア」へのブースの出展の活動計画

7月	【7月24日】iOPに参加する日本人学生及び阿見キャンパスの留学生の参加申込の締切
	【7月下旬】第1回ミーティング―参加者の顔合わせ、活動概要の説明
8月	【8月下旬】第2回ミーティング―ブースでの活動、展示物、物品販売についてブレインストーム。ブースの準備・運営は留学生と日本人学生のグループで行うことから、互いの連絡先を交換するよう伝える。
9月	【9月上旬】第3回ミーティング―グループで話し合ったことを他の参加学生及び阿見町・阿見町国際交流協会の担当者に向けて報告する。その後、各グループで活動の詳細について話し合い、「活動プロポーザル」を作成する。活動プロポーザルをもとに、阿見町国際交流協会が物品販売に必要な物品の手配をする。
	【9月下旬】第4回ミーティング―各活動の詳細を考え、準備する。
10月	【10月上旬】第5回ミーティング―イベントに向けた最終打ち合わせ
	【10月22日】さわやかフェアでのブースの出展
	【10月下旬】阿見町・阿見町国際交流協会の担当者を交えて活動の振り返りを行う。

表２　外国にルーツを持つ子どもたちに向けた学びの支援活動の活動計画

9月	【9月上旬】学びの支援活動に参加する茨城大学の学生の参加申込の締切
	【9月下旬】支援活動に参加する学生に対する事前研修の実施
10月～2月	【9月28日～2月1日】毎週木曜日16:00～17:30、阿見キャンパスにて、外国にルーツを持つ子どもたちに向けた学びの支援活動を実施する。 2週間に1回、茨城大学の日本語教育を専門とする教員が指導助言を行うとともに、本事業の最後には、阿見町・阿

	見町国際交流協会の担当者を交えて活動の振り返りを行う。

令和５年６月の申請時には、以下の役割分担で実施することを決めた。

連携団体
① 阿見町国際交流協会内、阿見町役場内、阿見町教育委員会との調整
② 会議及びさわやかフェアのブースの手配
③ さわやかフェアのブースの企画・運営
④ さわやかフェアのブースに必要な物品の購入
⑤ 町内の広報活動

大学
① 協力してくれる学生の調整
② さわやかフェアのブースの企画・運営
③ 阿見キャンパスの日本語教室の運営・調整
④ 外国人支援に関する学術的知見の提供
⑤ 報告書の作成・出版

活動内容及び成果

① 活動内容

本節ではまず阿見町の「さわやかフェア」へのブースの出展について述べる。「さわやかフェア」は毎年 10 月に阿見町総合保健福祉会館及び隣接する町有地広場で、町の健康・福祉・環境・産業・消防・防犯等において町内で活躍する団体や事業を PR するためのイベントである。新型コロナウィルス感染症拡大の影響で３年間中止されていたが、令和５年度は実施された。阿見町国際交流協会は例年「さわやかフェア」に出展をし、コロナ前には阿見町国際交流協会が運営していた国際農園（日本人と在留外国人が協力して作物を栽培する）で採れた野菜の販売を行い、国際交流事業の PR 活動を行っていた。しかし、2020 年に国際農園が閉鎖され、野菜の販売活動ができなくなってしまった。そこで、今年度は、阿見町の町民でもある茨城大学阿見キャンパスの留学生３名（インドネシアからの留学生２名、ベトナムからの留学生１名）の協力を得ながら、留学生の国や地域を紹介する掲示物の展示と留学生の国や地域の物品を販売するブースを設置した。そして、町内に住む在留外国人の存在を町民に認識させ、これまで外国人と接したことのない町民が在留外国人と触れ合える機会を創出することを試みた。本活動は茨城大学の iOP プログラムとしても提供し、活動には日本人学生２名も参加した。

７月に茨城大学グローバル教育センターのホームページ及び SNS、教務情報ポータルの掲示板等を用いて、協力してくれる日本人学生及び留学生を募集した。そして、8 月 24 日（木）に阿見町役場にて第１回目のミーティングを行い、ブースでの活動、展示物、物品販売についてブレインストームを行った。そして、9 月 14 日（木）に阿見町役場で行った第２回目のミーティングで、それぞれが担当する展示物及び物品販売の詳細を決定した。その後、学生はベトナムチームとインドネシアチームに分かれ、展示物を各々が準備した。

10 月 22 日（日）のさわやかフェアの出展では、学生それぞれが準備をしたポスター等を展示するとともに、各国から取り寄せた物品を販売した。ブースでは、物品の販売や掲示物を通して、住民と留学生が交流し、互いに親睦を深めることができた。

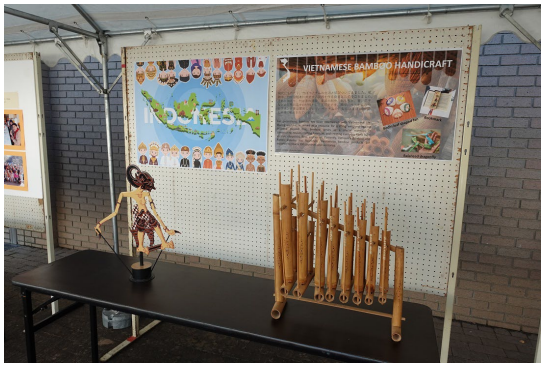

写真１ さわやかフェアでの展示物

写真２　物品販売をする学生達

次に、外国にルーツを持つ子どもたちに向けた学びの支援活動について述べる。茨城大学全学教育機構国際教育部門では、毎週木曜日５講時に、阿見キャンパスの留学生を対象とした日本語補習授業を開講している。令和５年度前期からは、阿見町国際交流協会日本語教室委員会の協力を得て、協会の日本語ボランティアに日本語補習授業にて本学の留学生に対する日本語指導のサポートをしてもらっている。阿見町国際交流協会の日本語ボランティアのサポートを得ていることから、令和５年度後期は阿見町内在住の在留外国人にも日本語補習授業を開放し、阿見町内に住む外国にルーツを持つ子どもたちへの参加を促すことにした。

７月に阿見町内で最も外国にルーツを持つ子どもたちが多く通うあさひ小学校を訪問し、日本語指導を担当する教員との意見交換を行った。その後、令和５年度は試験的な実施とし、あさひ小学校の児童のみを対象に募集をかけた。結果、６名の児童（４年生２名、３年生１名、２年生３名）が申し込んだ。また、茨城大学側でも本活動に支援者としてかかわる学生ボランティアを募集し、７名の学生（教育学部３名、農学部３名、人文社会科学部１名）が参加した。なお、全員３年生であり、iOP プログラムの活動として参加した。

支援活動は、９月 28 日（木）～12 月 14 日（木）の間に計 10 回実施した。活動は茨城大学阿見キャンパスで実施をしていたことから、子どもたちをあさひ小学校から阿見キャンパスまで連れてくる必要があり、阿見町町民活動課の職員が役場の公用車を用いて送迎を行った。児童たちは 15 時過ぎに阿見キャンパスの教室に到着し、まず大学生の学生ボランティアとペアになり、学校の宿題や国語の教科書の音読を行った。そして、宿題が早く終わった児童は、日本語を練習するためのワークシートに取り組んだ。

写真３　支援の下で宿題に取り組む児童

そして、休憩をはさんだのちに、児童たちが希望する言語学習のためのカードゲームやボードゲームで遊びながら、日本語学習に対する支援を行った。

写真４　言語学習のためのゲーム

12 月 14 日（木）の活動は、本活動の最終回であったことから、児童たちへのお楽しみ会ということで、学生ボランティアたちが準備をした特別なゲームの活動に取り組んだ。ゲームでは、児童一人ひとりに１枚スタンプカードが渡され、お題（封筒をみつけるとわ

かる）をクリアするとスタンプがもらえるというゲームを行った。

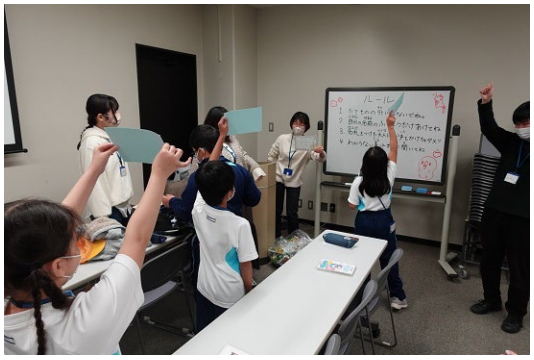

写真５　特別なゲーム活動の説明

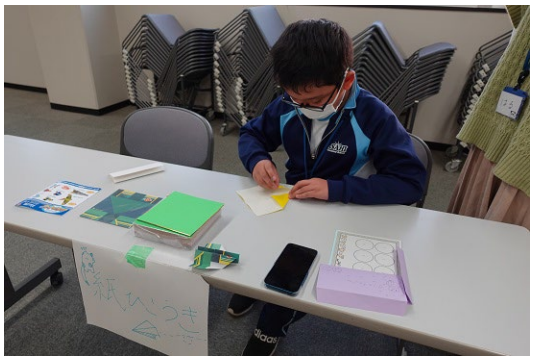

写真６　ゲームに取り組む児童

なお、本活動は茨城大学広報学生プロジェクトのメンバーが取材をし、大学のホームページでも紹介されている。
https://www.ibaraki.ac.jp/news/2024/01/22012252.html

② プロジェクトの成果

まず、阿見町の「さわやかフェア」へのブースの出展について述べる。本活動はこれまで在留外国人との接点があまりなかった一般的な町民に対して、在留外国人に対する理解を深める機会を創出することを第一の目的としていた。ブースでは、留学生たちが物品の販売や掲示物を通して、ブースに訪れた人々に対して自国について説明をすることができ、本活動の目的は達成されたといえる。また、ブースに訪れた人々が展示物や物品販売の商品に興味を持ち、それらについて積極的に質問を投げかけている姿が印象的だった。また、本活動に参加した留学生及び日本人学生も町民との交流を楽しんでおり、情報を受け取る町民と情報を提供する留学生双方にとって有意義な活動となっていた。

次に、外国にルーツを持つ子どもたちに向けた学びの支援活動について述べる。本活動の第一の目的は、外国にルーツを持つ子どもたちに学びの機会を創出することであり、毎週木曜日に実施した本活動を通してそれが実現できたと考える。また、本活動はあさひ小学校で日本語指導を担当する教員の協力を得ながら実施をし、子どもたちが授業時間外で不足していた学習を補うことができた。そして、参加した児童の保護者からは「子どもはとても楽しかったと言っていて、また参加したいと言っている」等、本活動に対する肯定的な声が聞かれた。また、学生ボランティアからは「週に１度子どもたちと対面で触れ合うことで、その子たちの日々の成長を感じ取ることができた」「実際に子どもが困っている様子を見て、学習言語のフォローの必要性や重要性をより強く認識した」など、本活動を通して実践的な学びを得ている姿が窺えた。

今後の課題及び展望

まず、さわやかフェアのブースの出展では、掲示物と物品販売である程度の交流を促すことはできたが、交流をさらに活性化させるためには、現地の手遊びやボードゲームで遊んだり、簡単な現地語レッスンを提供したりするなどして、より交流が促せるような企画を実施することも可能だろう。そして、外国にルーツを持つ子どもたちに向けた学びの支援活動では、茨城大学阿見キャンパスで実施をしたため、阿見町の職員に毎回小学校から送迎をしてもらう必要があり、町の職員の大きな負担となっていた。来年度以降は小学校近くの公民館に会場を移し、子どもたちには歩いてきてもらうなどし、職員にとって負担の少ない形を模索することを検討している。